枕草子をポルトガル語に訳した経験から

Junko OTA（織田順子）

枕草子のポルトガル語訳が企画されたのは2001年の 2 学期だった。それからようやく今年（2013年） 3 月にサンパウロの Editora 34という出版社より本が出版された。こう書いてみれば単に 3 行でまとまってしまうのになぜこんなに長い時間がかかったのか不思議に思う人もいるだろう。振り返ってみると、実に長い時間であり、その間にこの翻訳の仕事に最初から携わっていたメンバーの一人は退官し、一人は長大な論文を書いた。翻訳の半ばから加わった一人はその間に博士論文を書き、またほかの本も翻訳した。私自身もその間に大学内の業務のかたわら別の本を翻訳し、またブラジル日本移民100周年記念イベントや他の学会を企画した。というわけで、各メンバーのそれぞれの学務、研究活動や役職の合間を縫ってこの本は出来上がったということである。その反面、この翻訳は出版社の依頼を受けて始めた翻訳でなかったため、その分メンバーが必要と思う限りの時間を使って終えた事業であると言えるであろう。

そもそもことの始まりは、当時国際交流基金の客員教授派遣プログラムを通してサンパウロ大学に来ていただいていた客員教授の渡辺実先生の提案等から企画が立ち上がり、当大学日本文化研究所のメンバー構成ができたことにある。当時すでに退官していた Geny Wakisaka 先生に、Luiza Nana Yoshida、Madalena Natsuko Hashimoto Cordaro、私、Junko Ota が加わり、そしてさらにごく最初の時点では当時サンパウロ州大学（Unesp）にいた Neide Hissae Nagae が参加していたが、Lica Hashimoto が後半前後の時点で加わったと記憶している。それ以前同研究所では、やはり Geny Wakisaka 先生のもとでいくつか翻訳事業を手がけたことがあり、『雨月物語』、明治文学作品、近代文学作品、さらに大江健三郎の、いずれも短編集をグループでポルトガル語訳を出版していた

が、ひとつの作品全体を全員で訳したことはなかった。ただ、一人二人でやるにはかなりの労力が必要とされる内容の仕事であると判断し、やはり複数の人数で分担することに決まったのである。文学が専門でない私までが参加することにしたのは、ひとつは翻訳に対する興味、ひとつは語彙などでの関係で言語専門のものが一人ぐらいいてもいいだろうぐらいの軽い考えだった。怖いもの知らずとはこういうことであろう。

まず基本的に陽明文庫蔵本を底本とした岩波書店の新日本古典文学大系の枕草子を翻訳することに決め、新潮社やその他多くの必ずしも同じ底本を用いていないものも参考にすることにした。はじめは作品を大きく人数分に分け、それぞれ持分を決め、一週間の間隔で翻訳を持ち寄り、全員で読むという形にしたが、あまりはかどらず、後になってから、それは最初の段から少しずつそれぞれの訳する分を決め、集まった日にグループ全員で原文を読み、その部分の翻訳を再読し、そしていくつかの解釈と比べたりポルトガル語の訳を推敲したりする形にした。英語やフランス語の訳も参考にし、実際、原文の解釈が難解な場合や訳語の適切さなどもいろいろと議論しながらの作業で、なかなか進まないこともあり、かなりの時間がかかったことも事実である。

また、翻訳を一応終えた後はしばらくブランクがあり、その後出版に備えて作品、作者の紹介、また時代の政治的文化的背景などについての説明もいくらか加える必要があると考えた。同様に、花、鳥、服飾関係の名前、建築物、といっても室内の部分または使われる家具類などの名前、色、楽器、暦さらに官位などの説明を随時加えた別の語彙表も翻訳の後につけることになった。もちろんそれに携わったメンバーがそれで平安期の時代描写が詳しくできたとは思っていないが、ある程度の紹介がなければ、日本の平安時代の事情に明るくないブラジルの読者にとっては難解であろうと考えたからである。

いろいろな翻訳のプロセスの中でも、特に難しかったのが和歌のポルトガル語訳である。まずは意訳から始まり、最後にはそれをポルトガル語のシラブルに当てはめる工夫をした。ポルトガル語の言葉が後ろから 2 番目のシラブルまたは最後のシラブルに強いアクセントが来るため、和歌の5－7－5の場合、ポルトガル語で 3 行にし、各行で 5 番目、7 番目、5 番目のところに強いアクセン

トがくるようにした。たとえば、

　かづきする　あまのすみかを　そことだに　（80段、岩波書店、99ページ）

の場合は、

　Jamais reveleis

　A morada passageira

　Da mergulhadora

となる。

　また、ある時点では、文を読んである名詞が単数か複数かについて議論したこともある。208段の、

　「五月四日の夕つかた、青き草おほくいとうるはしく切りて、左右になひて、赤衣きたる男のゆくこそおかしけれ。」（岩波書店、255ページ）

の「赤衣きたる男」の解釈で、これは複数かもしれないという意見が出た。が、結局もし複数であればそれを明確にした人数、四､五人などという言葉が出るべきだという意見が何とか通ったので、次のように翻訳された。

　“No entardecer do quarto dia do quinto mês, é prazeroso ver um serviçal em trajes vermelhos carregando nos ombros uma vara com dois cestos cheios de uma profusão de folhas verdes de íris aromáticos, cortados com muita perfeição.（Sei Shônagon, *O livro do travesseiro*, São Paulo, Editora 34, p. 375）

下線のある部分が「赤衣きたる男」に当たるのであるが、“um serviçal”、つまり「ある下人」という風に、単数になっている。

　また、ここで「男」を「下人」と訳したのは、直訳そのものでは読者にとって状況があまり明確にならないという事情を考慮してのことである。もちろん原文になるべく忠実に翻訳できるのが本来ならば理想であるが、こうした時代と空間を隔てた作品の訳には、できるだけその状況が説明できたほうがいいという判断をしたのである。それでも結局、多くの部分では文中の言葉の意味または文化的背景などを文の外で表す詳しい注を惜しまず、298段に追加された30段の全訳に対し、合計419もの訳注をつけることになった。これは出版社に原稿を最初に出したとき、多すぎるというクレームがあったのだが、さすがにこれほど多くの注を文中に収めることもできず、このような古典の作品におけ

る注の重要性を説明して理解してもらうしかなかった。

また、宮中の様子を描く内容の段では、作者の視点から見る中宮また周りを取り巻く人々のことを述べる場合、敬語を使って述べ、その代わりに主語は省略することが多い。たとえば128段では、初めの部分に、

（……）経仏など供養せさせ給しを、

とあるが、段の一行目であるため、訳のほうでは主語が欠かせない。そのため、上記の部分のポルトガル語訳は、

(…)Sua Consorte Imperial mandava realizar cerimônias fazendo copiar sutras e pintar imagens de Buda.

と、主語である中宮を待遇表現で明記している。ただ、作者の中宮に対する敬意をいくらか表現するため、その表現のイニシャルを大文字にした。これはポルトガル語ではこのように使えはするが、文全体にイニシャルの大文字の言葉が多いと重い感じになるため、最初の時点では出版社の編集者はそれに反対したが、やはり事情を話して、そのままにしてもらったといういきさつがある。

こうしていくつか例を挙げた通り、いろいろな困難が伴った翻訳作業ではあったのだが、終わった後振り返ってみると、その間に頭をつきあわせながら読んだ内容に関してみんなで共感して大笑いしたことも何回もあった。いったい何がおかしくてそんなに笑ったのか、今となっては当時の仕事の記録を残していないため、思い出せないでいるが、楽しかったのは事実である。

つまり、われわれは翻訳者である前にまず読者であったことが、ひとつ挙げられると思う。また、いろいろな段を読み、解釈を試みることによって、筆者が生きていた地理的そして時間的に遠く離れているはずの世界を少なからず生きることができたのではないかと思う。そしてその経験を少しでも多くポルトガル語を読むブラジルの読者に伝えることができたなら、この10年を超えた仕事も甲斐があったといえるであろう。